

2、主な遺物

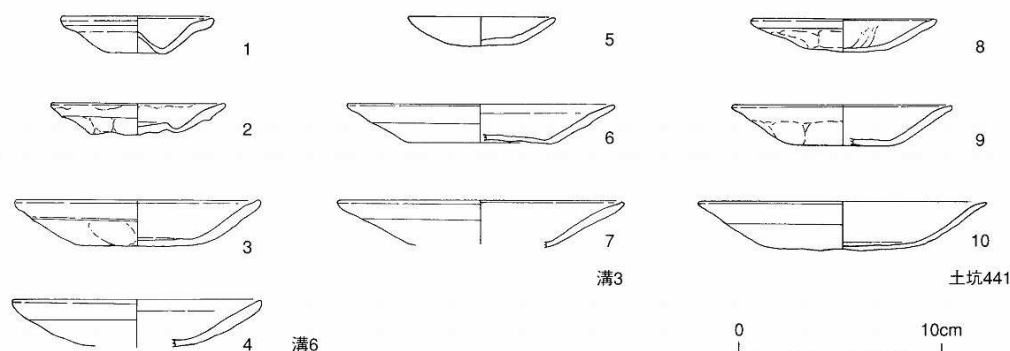


図9 出土遺物（土師器皿）実測図（S=1/3）

図9 出土遺物（土師器皿）実測図

①土器・陶磁器類

a 鎌倉時代以前

平安時代にさかのぼる土師器高坏脚・身（平安時代）、緑釉陶器、鎌倉時代から南北朝期頃の東播磨系須恵器瓦（平安時代終わり頃から鎌倉時代）などが出土しているが、遺構に伴う遺物は、前述した土坑 493 出土の瓦のみである。

b 室町時代以降

溝6（図9・1～4）

28 トレンチの南壁で・溝6の続きと思われる堆積層の最上部（滞水状態を示す粘土層）から出土した土師器皿である・溝6上層の堆積はトレンチによって異なり、この粘土層は隣接する26 トレンチでは認められなかった。2は褐色系皿で体部上半を直線的に仕上げ、下半に凹凸の激しい指押さえを施すものである。時期は15世紀中頃までに比定される。3は白色を呈している。資料が小片なため、体部傾きの信頼性が低いが、傾斜度を急にすると15世紀前半の特徴を示すことになる。4は褐色系の皿である。体部下半に丸みを持ち口縁部につまみ上げを施す。15世紀後半の特徴を示す。なおこれらの資料以外に、28 トレンチの溝6中層から鎌倉時代に比定される瀬戸の入子が出土している。

溝3（図9・5～7）

上層出土の土師器皿である。6・7共に直線的な体部とわずかにつまみ上げの痕跡を残す口縁端部から構成される。16世紀前半に比定される。

土坑441（図9・8～10）

一括投棄された土師器皿の一部である。8は底部内面に刷毛状の痕跡を残す。10は深手の皿で、体部はやや丸みのある底部からゆるやかに立ち上がり、外切して尖り気味に仕上げられた口縁部につながる。15世紀後半代の特徴を示す。

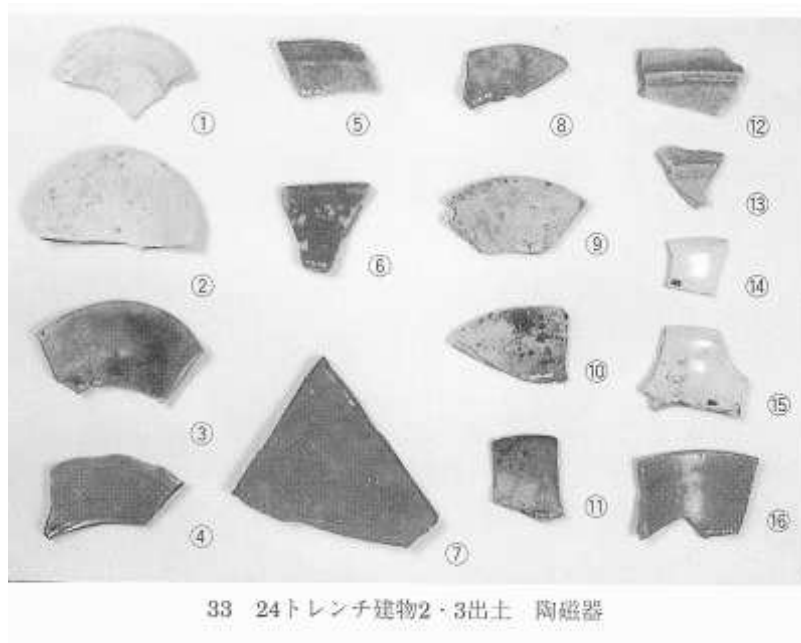
建物2・3（写真33）

いずれも建物2・3を築造する以前の基盤層あるいは建物2の床面を構成していた層から出土した資料で、1～7が建物2・3南出土、8～16が建物2出土である。1～3・8～11は土師器皿である。1は内面の底部際に太い沈線を描き、口縁端部につまみ上げを施す。2・3共に口縁端部につまみ上げはわずかに残る。10は薄く直線的な体部と低いつまみ上げを残す。16世紀前半の特徴を示す。5は瓦器鍋である。口縁部は外折し、端部は内傾して短くたちあがる。16世紀前半代に比定される。6は瓦器すり鉢である。内面に揺り目はもたず、あらい平行磨きが施されている。

4は青磁輪花皿、14・15は白磁端反皿、16は篋描き青磁連弁文碗である。

7は備前窯甕、12・13は古瀬戸卸目皿であり、体部の傾きはゆるやかで、受け部の幅は広い。口縁端部は丸みをもって仕上げられ上端が尖る。

後者の時期は古瀬戸後期4新段階とされる。おおむね15世紀後半から16世紀代にかけての資料がみられる。建物2・3はこれらの資料を含んだ層を基盤としているため、その築造は16世紀後半より新しい時期に比定できる。



33 24トレンチ建物2・3出土 陶磁器

写真33

建物5 焼土下部 (写真34)

1～4は土師器皿である。3の断面は紡錘形を呈し端部につまみ上げは認められない。16世紀前半の特徴を示す。5は土師質焼成である。外面に白色の化粧土を施し、両面の中央にくぼみをもつ。6は景德鎮窯の染め付け皿である。内面に十字花文を描く。7～9は古瀬戸卸目皿である。7の口縁部は玉縁状に仕上げ、8は受け部状の形態を呈する。9は底部から体部にかけての部分である。大窯1期(15世紀末～16世紀初頭)に比定される。10は丹波窯すり鉢である。口縁部は端部に丸みをもった断面三角形に仕上げられ、内面の口縁端部直下に浅い凹線がみられる。内面に単線の播り目が施される。11は信楽窯すり鉢である。端部は細くつまみ上げられ、直線的にのびる。12は土師質焼成である。平らな底部からゆるやかに立ち上がる体部下半が続く。器形は不明である。13は瓦器釜である。鏝部は断面が三角形を呈し、口縁部は直線的に肥厚して立ち上がり、端部上面に平坦面を形成する。14は平底の備前窯壺と考える。15は朝鮮半島系の壺である。内面に暗黄灰色の釉が、外面に暗緑灰色の釉が施される。底部外面に重ね焼きの痕跡を残し、胎土は極めて緻密で灰褐色を呈する。

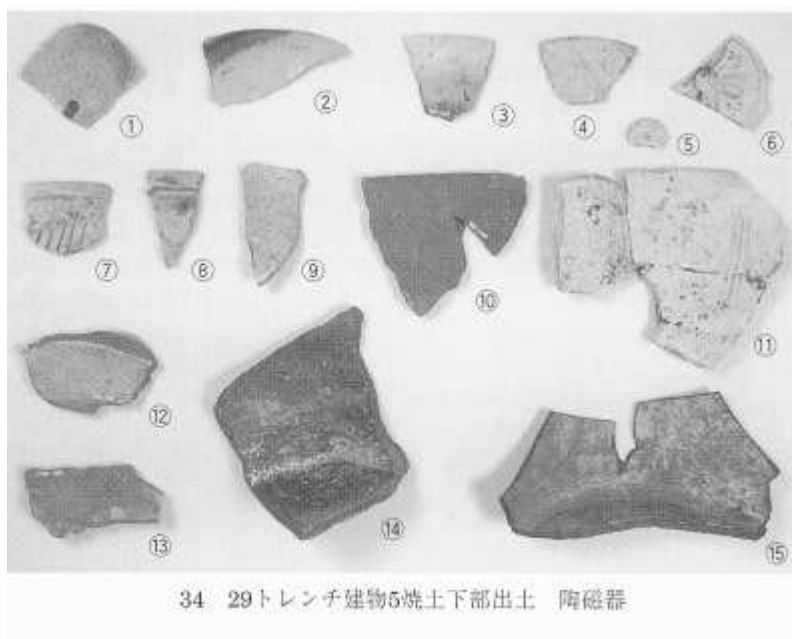
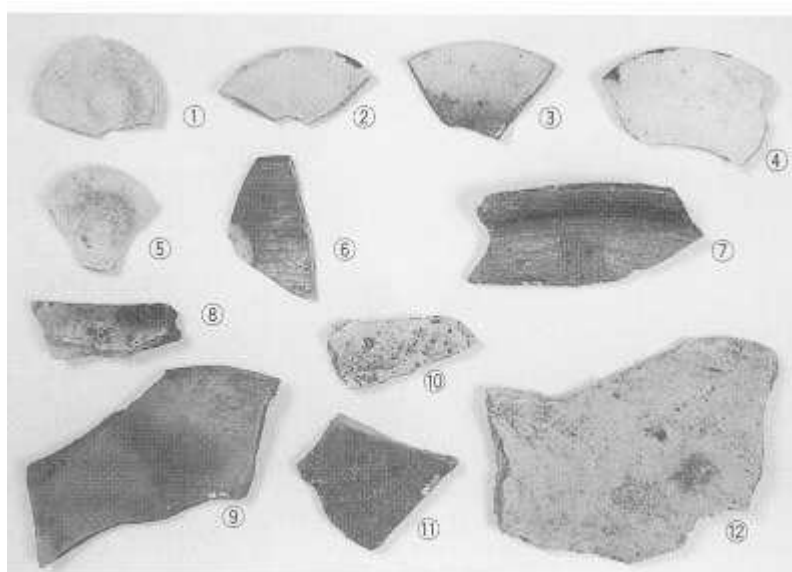


写真34

建物5 せん列除去中 (写真35)

1～5は土師器皿である。4は丸みのある体部から外反気味にのびる口縁部につながり、端部に煤の付着がみられる。15世紀後半に比定される。6は瓦器のすり鉢である。口縁部はやや上方に屈曲し、内面に横位の磨きがみられる。7は備前窯すり鉢である。口縁部は下端がやや突出し、上端は長くのび外面に二段の緩やかな起伏がみられる。16世紀中葉頃と考える。9は瓦器鍋である。口縁部は外折し、端部の突出はほとんど失われている。16世紀前半に比定できる。10は信楽窯すり鉢である。11は常滑窯甕胴部である。12は信楽窯甕胴部である。



35 29トレンチ建物5埴列除去中出土 陶磁器

写真35

② 鑄造関係 (図8、写真36・37・38・39・40)

調査区北半のトレンチを中心に、鑄型・スラグ・鞆羽口・坩堝などの鑄造関係資料が出土した。

1～3は羽口である。3の内径は3.2cmである。

5・6の形態は両側縁の平行しないU字形を呈する。厚さ4cmで、外面の一部に薄く溶解した滓を残す。

7・8は、坩堝炉の上部に使われたいわゆる屏風と呼ばれる資料と考える。共にゆるやかに彎曲した内面に溶解した滓が付着している。8の最大長は12.5cmである。

4・9～14および写真38・39は鏡鑄型を代表とする鑄型類である。このうち図8-3は片面に斜格子の刻みを入れている。大きさは厚さが2.3～4.1cmで、14の最大長は17.7cmである。図8-2は片面にうすく緻密な粘土が張り付られ、その表面に篋押しで施された文様が残る。厚さは2.3cmである。



写真 36



写真 37

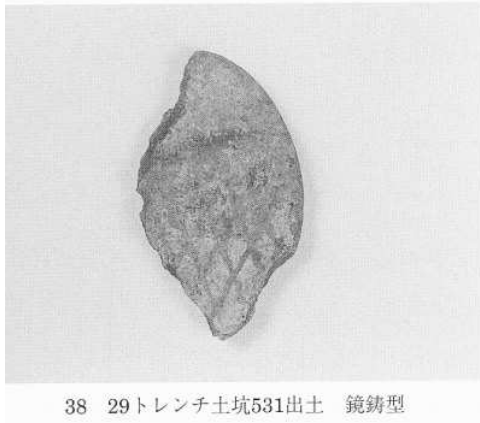


写真 38



写真 39



写真 40

③金属製品

鉄製品と青銅製品がある。現時点ではサビの除去が十分ではないため、以下肉眼での観察事項を中心に記述を進める。

a 鉄製品

鉄製品は、建物や石組にともなう釘・鋸などの固定具がほとんどで、他に加工具の刀子、武器の一部である小札、煮沸具の鍋が出土している。

加工具

刀子は建物5からの出土。残存長 5.4 cm、刃部は先端部を欠損するが推定で5～6 cmとみられる。柄の部分には、木製の装具にはめ込んで用いた痕跡が残る。

武器

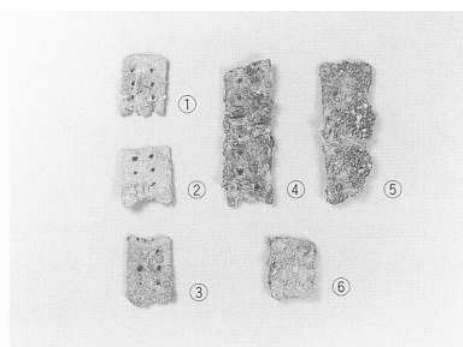
武器（甲冑）の一部をなす小札が、建物5・6および石組4から出土している（特に建物6でまとまって出土している）。平均すると幅2～2.3 cm、長さ6 cm、厚さ0.2 cm程度の大きさである（写真45）。現在30点以上確認している。

煮沸具

鍋は、建物5内の焼土中から出土している。径は復元で約28 cm、深さ7 cmのボウル状のかたちに復元できる（写真48はその一部である）。一ヶ所に長さ8 cmの注口部がある。吊金具は、注口部をまたぐかたちで橋状にとりつく短い帯状金具と、さらにその金具から全体をまたぐように装着される大きな帯状金具からなる。底部外面には、高さ0.5 cmの脚とみられる突起が確認できる。

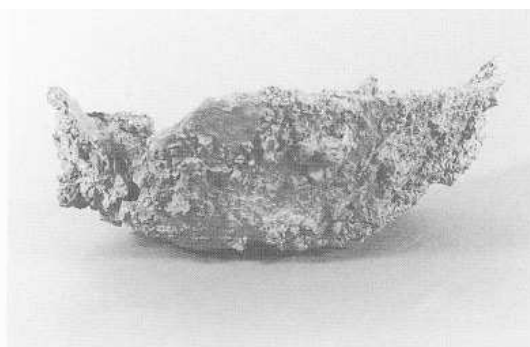
固定具

釘は、建物2・3・5および石組3・4から多く出土している。おおきく大中小のサイズに分けることが可能で、大は長さが7 cm、中は5 cm前後、小は3.5 cm前後となる。建物2や、炉15からは、木目の残存するものが出土している。他に鋸とみられる固定具が3点みつまっている。建物5および第2層出土。



45 29トレンチ建物6 (①②③)・石組4 (④⑤⑥) 出土 小札

写真 45



48 29トレンチ建物5出土 鉄鍋

写真 48

b 青銅製品

実用具、装身具、喫煙具のほか、銭貨、飾り金具など、多種多様な青銅製品が出土している。ここでは用途のわかるものを中心に記述する。

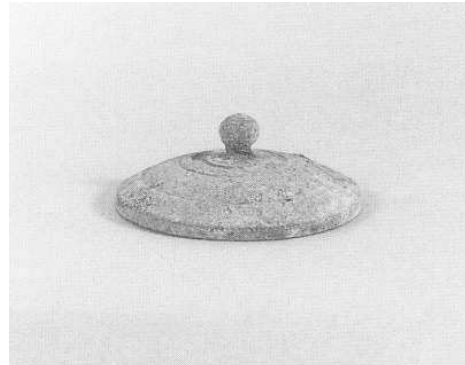
実用具

容器として、銚子あるいは水指とみられるものがある（写真 52）。水指は、石組 3 から蓋および底部が重なった状態で出土した。全形は不明だが、蓋は径 17.5 cm で、つまみがつき、下面にかえりを有する。底部は、高台の部分を中心に高さ 2.7 cm までが残存している。また、銚子とみられる割竹形の青銅製品が共に出土しており、これと同一固体である可能性も考えられる。その他の容器としては、建物 2 より、径 8.6 cm でつまみをもつ容器の蓋が出土している（写真 43）。このほか、長さ 7.1 cm の匙 1 点、釣り鉤 2 点が、第 2 層より出土している。



52 35トレンチ地下蔵（石組3）出土 青銅製容器

写真 52

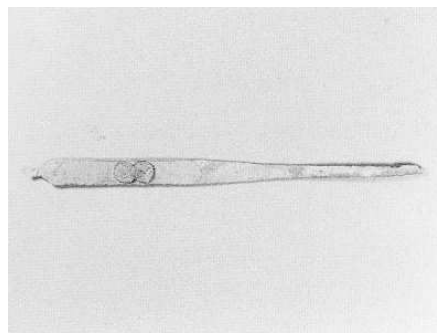


43 24トレンチ建物2出土 青銅製蓋

写真 43

装身具

筭が建物 2・3 から、計 2 点出土している。完形のもの（写真 44）は長さ 19.4 cm、もうひとつは長さ 4.8 cm が残る。また、包含層（第 1 層）から簪が 4 点出土している。刀剣装具では、径 6.7 cm の太刀鐔飾り（第 2 層）・柄飾り（建物 2・3 周辺）、小柄（建物 2・3 周辺）がある。柄飾り（写真 42）は、長さ 3.8 cm、幅 3.5 cm で、黒漆を塗布した痕跡が明瞭に残る。小柄は中空で、長さ 9.9 cm が残存する。



44 24トレンチ建物2・3出土 青銅製筭

写真 44

喫煙具

煙管は、ほとんどが包含層（第1・2層）出土であり、現在雁首5点、吸口19点を確認している。竹材とみられるラウの一部が残る個体がある。

化粧具

柄鏡がある（写真51）。石組3より出土。鏡面は径18.9cm、縁部の厚さ0.5cmで、被熱によってゆがんでいる。柄の部分は長さ10cm、幅3.8cm、厚さは0.4cmである。鏡背部には、輪の中に篆書体で「桐」の字を鋳出し、むかって左脇に「稲村備後守藤原吉長」の銘がある（柄鏡拡大写真参照）。

このほか、建物6から花形皿（写真50）が出土している。径5.2cm、高さ2.7cmで、16の花弁を表現する。紅などをいれる化粧具と考えられる。



写真 50



柄鏡拡大写真

銭貨

銭貨は現在 200 点前後確認している。内訳は、中国唐代の開元通寶、北宋の銭貨（景徳元寶、祥符元寶、皇宋通寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大観通寶、政和通寶）、明代の洪武通寶、永楽通寶があり、ほかに無文の銭、江戸時代の寛永通寶、文久永寶、近代以降の銅貨がある。遺構別にみると、建物2で10枚（開元通寶、祥符元寶、紹聖元寶など）、建物5で17枚（熙寧元寶、元豊通寶、政和通寶など）、土坑527で56枚（寛永通寶を含む）の銭貨が出土している。

これらのなかには、数枚の銭貨が錆着し、「さし」の状態であったと推定される例がある。また、小判を模したような青銅製品、骨製の銭貨なども出土している。

その他

塔を模したような青銅製品（はかりのおもりか）がある（写真49）。高さ6.2cm。頂部には径0.8cmの吊り輪が付けられている。建物5出土。板状の青銅製品（写真41）は、長さ18cm、最大厚1.5cm。両端で厚さが異なり、長軸に沿って湾曲する形状から釣鐘などの大型銅製品の一部とみられる。建物2・3出土。また石組3からは、筒形で装飾を施した長さ12.5cmの青銅製品（衣桁の飾金具か）が出土している。

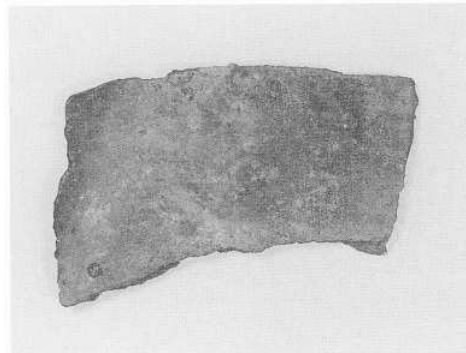
なお瀬戸美濃系陶器については藤澤良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）、金属製品と

鑄造関係資料については、久保智康（京都国立博物館）・中村潤子（本学講師）・杉本憲司・門田誠一（佛教大学）・陳波（関西大学）各氏からご教示いただいた。記して謝意を表します。



49 29トレンチ建物5出土 青銅製品

写真 49



41 24トレンチ建物2出土 銅板

写真 41